

浄土

六月号



蓮

法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌第三五二号)
昭和四十四年五月二十五日印刷 昭和四十四年六月一日発行

第三十五卷

第六号



目 次

表紙「はなしょうぶ」松濤達文画

岸浄土門主再任式		(2)
シルクロードとコーカサスへの旅日記①	佐藤治子	(6)
可能性について	小沢憲珠	(11)
十二因縁⑥ 妄念の中の念仏(触)	渋谷賢応	(14)
死と愛 或る青年の不慮の死に思うこと	長谷川昌光	(17)
私の座右銘 教団は和合を生命とする	広瀬了義	(20)
ハガキでひとこと 梅雨によせて	星崎三郎	(21)
ノーベル文学賞受賞者川端康成氏とおかげさま	細田隆善	(22)
仏事の心得とお作法① 合掌と礼拝について	福西賢兆	(24)
幸福(苦を超えること)	宮川満	(26)
ひとくち伝記⑥ 悲壮な白衣の激励	高橋良和	(30)





今月のことば

梅雨の季節のおとずれは、一方には、満員電車で味うむんむんした鬱陶しさを覚えますが、他方、若葉が美しく洗われ、しとしとと降る雨の雫がつたわって大地にそそがれしみる風物は、かわききった自然に潤いをあたえ、生き生きとしたものを感じます。

しかし、最近の都会では、みずみずしい緑の自然にふれることもすくなくなり、また近代化の波は、無為に自然を破壊していくような気がいたします。都会のみならず、地方にいたっても、農山村の自然の美しさが、次第におびやかされていくような感じがいたします。

いままで、野を歩けば、野の石仏があり、辻には、馬頭観世音の平たい石が立っており、古ぼけた堂宇も、自然の美しさにとけこんでいる農山村のおおらかな姿のなかに、祖先の息吹きを感じることにも一泌でした。この頃では、自然の美しさも、平気で破壊されていきますし、なんら自然に対する恵みや、畏敬の感情がうすれていくようです。

かつてイギリスの山岳隊が、ヒマラヤの初登頂に成功したとき、かれらが「われヒマラヤを征服せり」と誇らしげに叫んだ、そのかたわらで、同行したネパールのシエルパが、敬虔な祈りをささげながら「山が登ることを許してくれた」と感動しながら謙虚に語ったという心情を、いま思い出しました。

そこには、素朴にして、純粹な感情がみちています。すばらしい人生に対する哲学を体得しているような気がいたします。それは決して、知識によって得たものではありません。他人が見失いつつある、人間の崇高な精神を、そこにみることができます。自然に対する畏敬、不思議さを感じることが、とりもなおさず、自分みずからに謙虚さと反省の心情をみることであります。



岸 浄 土 門 主 再 任 式

吉水の法燈ゆらぐ知恩院の御影堂は寂として声なく、あかあかとテレビのライトの光りだけが暗い本堂を照らし出し、アイモの音か無気味な廻転音を出している。

昭和四十四年四月十八日の正午、今や式典はおごそかに進行し、クライマックスに達しようとしていた。

「大本山法主を代表して、増上寺法主椎尾大僧正台下の御祝辞を頂きます」

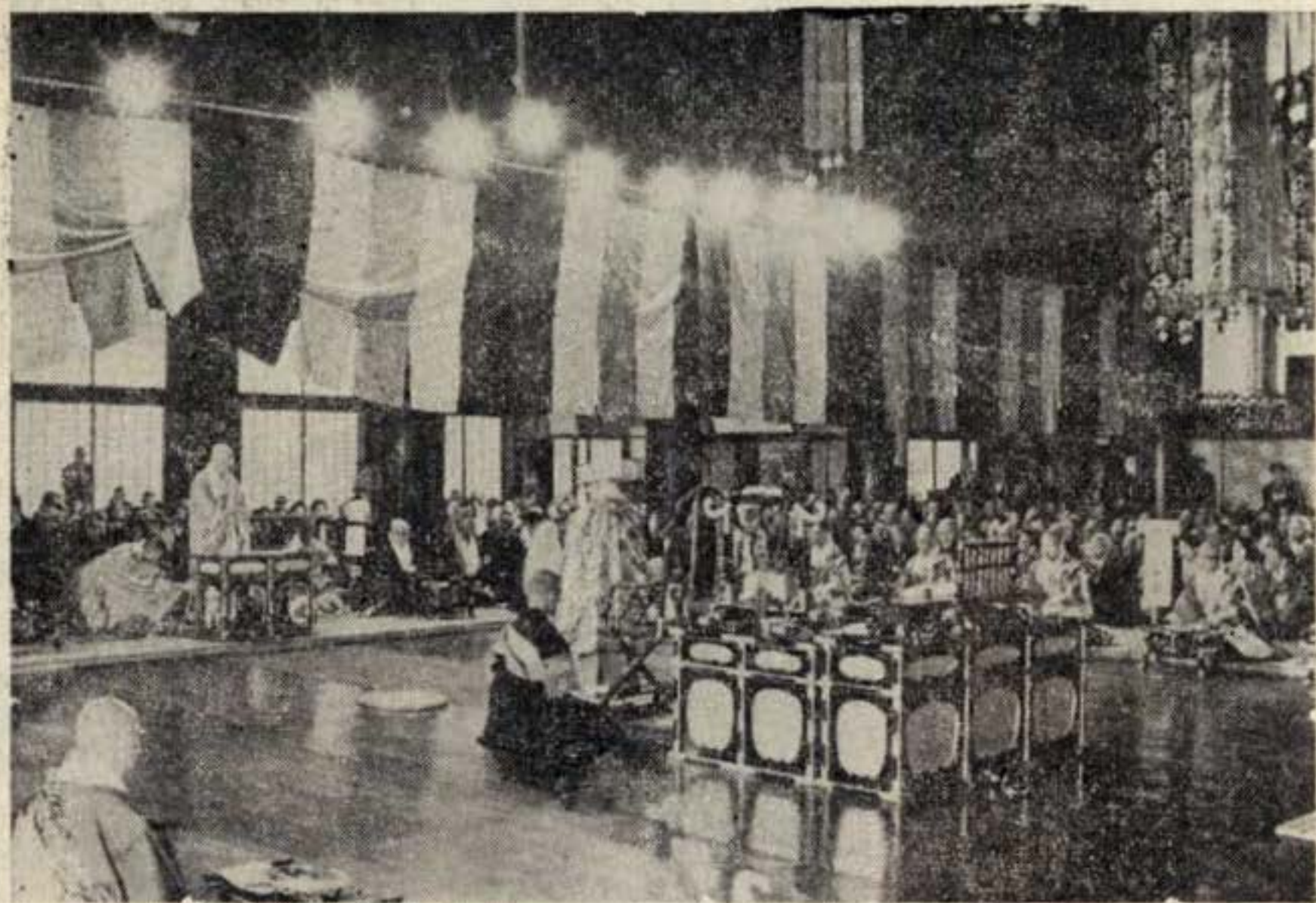
司会の二本松部長の静かな声が流れた時、盲目の椎尾僧正は軽くうなずかれた。そして侍僧に支えられながら、この頃とみに弱くなった足を引きずる様に内陣に進まれた。それは、不安定な足どりと共に、まことに長い時間の様に感ぜられた。信徒参列者の間に波が起った。九十三才の老法主の出現に、驚きと好奇の波がうずまいたのに違いない。曲象にそれまで腰かけた

まま祝辞を受けておられた岸門主は、大先輩の祝辞を受けるため、曲象を離れて立たれた。椎尾法主は漸くたどりついた正面のマイクに、やや左斜めを向いて、岸門主と対せられた。侍僧に正面を向かせられたのであるが、目の見えぬため、やや向きが違ったらしい。椎尾法主はふるえる手を合掌して一礼された。そして、あのしわ枯れた声で次のような事を言われた。

「私が生涯で感激した事が三つある、一つは、陛下の前で十念が授けられた時。もう一つは伊勢の大神宮の前で十念が授けられた時。そして、最後のは今日ここで、門主推載のこの時に十念が授けられることである。私は今ここでお十念を授けたい。」
「そう言い終った法主は、出きる限りの声を張り上げて、お十念を称えられた。そして、

「ますますお元気で宗門の為にお尽し下さい」

＝大本山増上寺法主椎尾大僧正台下の御祝辞＝

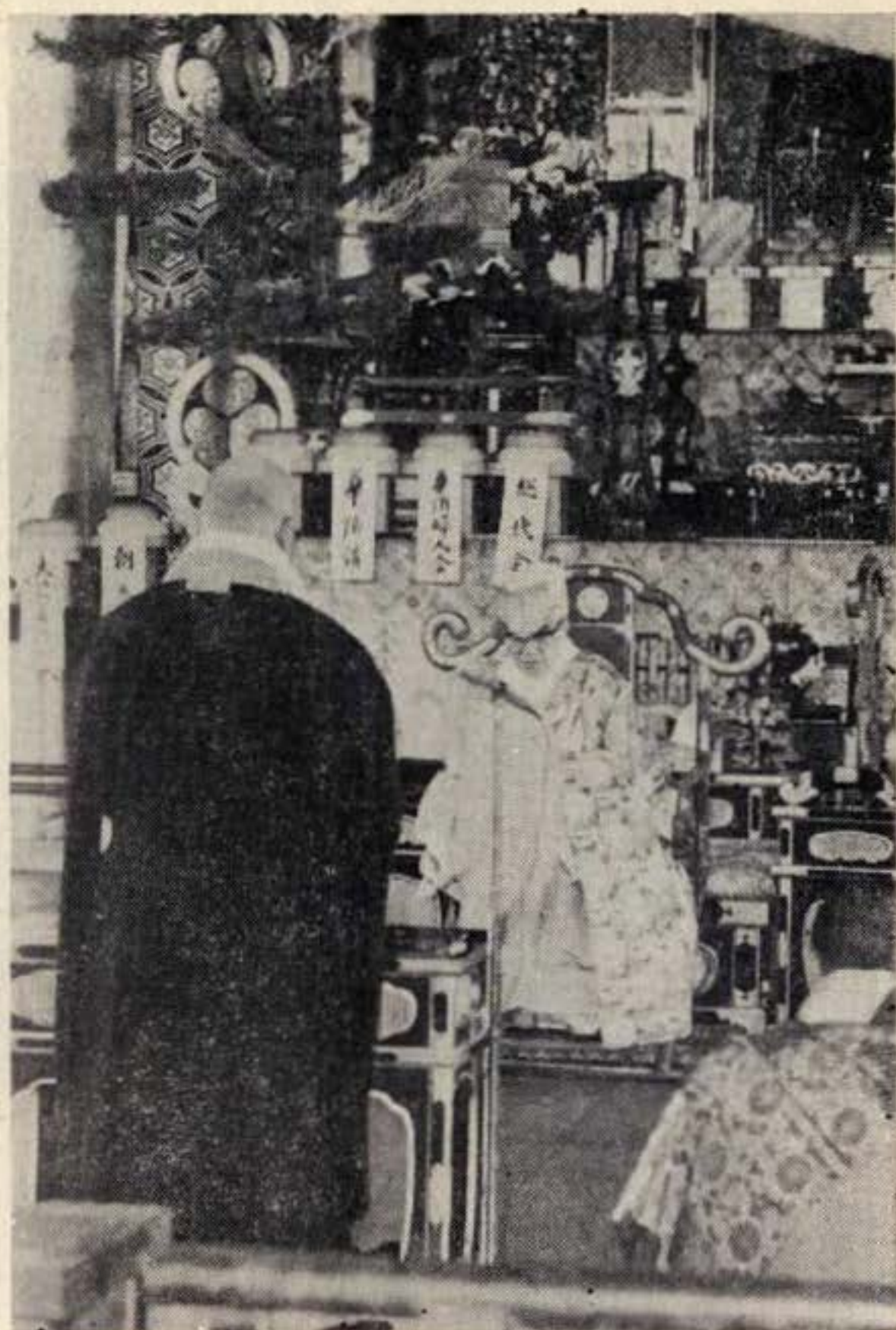


と言って祝辞を終られた。ああなんと感激的な、そして何んと浄土宗的な、そして、劇的なこの一瞬であった事であろうか。

万堂は寂として声はなかったが、多くの人が胸をこみあげてくるものを感じ、又多くの人が目頭を押えた。特別信徒の人々はハンカチを取り出して目をおさえた。この感激的な光景は、この座に居合わせた人々には、それぞれの取り方で感激的であったに違いない。長い分裂から合同へ、そして七年を経た今日、再び宗門一致してこの岸門主を頂いた時のこの感激。それはそうした歴史の渦中の中にいた人々にとっては、又それぞれの感懐があるに違いない。

信徒の人々にしてみれば、唯有難さに涙こぼれるとあったものでなかったであろうか。老齢の椎尾法主を目の前にして、そしてこの授与十念の姿は、浄土の教えを地で行く最もな姿であると共に、又そうあらねばならぬ姿であるからである。いかなる長たらしい祝辞や、美辞麗句よりも、この一辺の念仏は、すべてを言い尽して余りある偉大なものであると感ぜずにはいられない。

この日は晴れ渡ったよい日であった。そしてこの広



Ⅱ 稲岡浄土宗議会議長の御祝辞Ⅱ

い本堂も東西から馳せ参じた人々で一杯であった。荘厳な法要の後の小林宗務総長や、稲岡宗会議長の祝辞も型通り過ぎ、そしてこの椎尾法主の挨拶で、式典は最高潮に達した。そして、その後幾つかの祝辞もあったが、何としても椎尾法主のこの劇的な対面と授与十

念は、しくまれざる活劇ともいうべき感激を残して、いつとはなしに終了したと言ってもよい程のものであった。

遅咲きの桜が広い知恩院の境内のあちらこちらを飾っていた。それは、今日の盛儀を祝うかのようなであった。十九日から恒例の御忌会が催されるとあって、本堂の周囲や内部は、五色の曼幕で色どられていた。そして廊下は赤い絨毯で通り道が清められていた。この華やかさの中でのこの式典は、いやが上にも華やかで厳かなものであった。

岸門主は、再任に当って、浄土宗新聞に御挨拶を寄せられ、次のように言っておられた。

「私が昭和二十三年の十一月一日に知恩院第八十三代の法燈をつぎましたときに、私の心をささえてくれしました言葉は、『身はいやしくて、心はたかくありなん』というのでありました。この言葉は一言芳談抄に出ているのであります。



＝参集の宗内関係者の方々＝

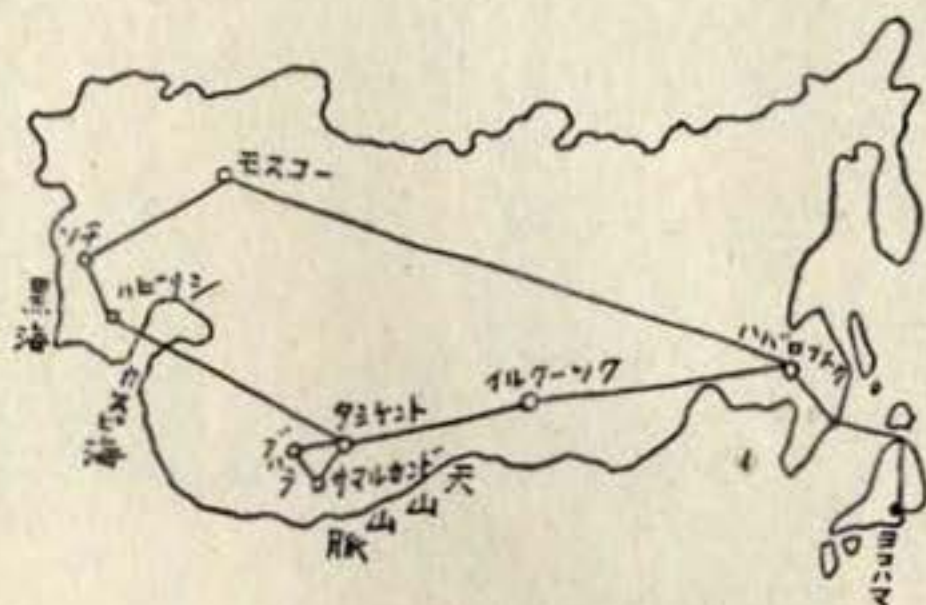
私は門主再任に際しても、二十一年前に祖山の法燈をつぎましたときの心のささえとなった教仏房の『身はいやしくて、心はたかくありなん』という詞が、同じように私の心のささえとなっているのであります。『身はいやしくて』というのは私共の愚かなる現実であって、宗教的反省による機の実感であります。『心はたかくありなん』というのは私共の求めてやまざる理想であって、法の追及であります。いやしく、低く、愚かなる私共の悲痛なる現実には、私共の理想である高くして尊い法を具現せる仏の本願によってのみ救われるのであります。仏の本願とは称名念仏であります」

かくして岸門主は、宗門興隆の道も、祖山の安泰も、社会の福祉も、この念仏以外にないと断言されている。われわれは、ここに再任された御門主と共に、この御門主のお言葉に従い、念仏の道を実践して、一には自らの道を歩み、一には浄土門興隆の一翼として努力しようではないか。もう深い春の日ざしは、これからの浄土門の動きの前途を、明るく照し出していた。

(編集部)

シルクロードとコーカサス

への旅日記 (第一回)



佐藤治子

シルクロード！ 長い事、聞きなれたこの「シルクロード」への旅に参加しようときめたのは一月半ばであつたろうか。毎日新聞の広告では人員四十五名で締切るといふ。私はすべり込みで辛じて住職について行けることになった。

天山山脈の北の「どの辺」を通っているのだろうか、うねうねと長い径はどう通っているのだろうか。「シルクロード」とは親しみのある名ではあつても、さて頭の中にえがく東洋から西洋に、三蔵法師の歩るかれた道、遠い昔隊商が往復した道は、モヤモヤとして考えがつかない。

出発に先立って私はこんなものを用意した。お茶・小型ゆわかし・固形燃料二個・梅干を幾つかに分けてびんに一杯・チリ紙・紙タオル・パスタオル・硬水用石鹼二個・小型懐中電灯等は、特にヨーロッパでの経験を思い出しながらカバンにつめたものである。これらがどんなに役立つことか。毎日メモをしてきた日記帳をたどり、書いていこうとしている「シルクロードへの旅行記」に、これらの品々がクロースアップして来るのである。

なお、この旅行に参加された方々の中で大学の先生方高等学校の世界地理・世界歴史の先生たちが多数参加さ

れ、それぞれの部門に於て旅行を楽しんでいられた。

××××××

三月二十一日。A班の私たちはソヴィエートの船をみたいな、という孫たちの申出も「ごったがえすから御断り」というエージェントの注意を聞き、長男に送られ、真白な船体割合小さい船にのりこんだ。

十一時出帆。送る為に波止場に何度も立った私は岸壁をはなれて行く船に、今度は自分が乗っている事を考へ、これから北上するソヴィエートの甲板に立って港の遠く近くを眺めていた。十二時四十分、東京湾を出る。浦賀水道にさしかかるとゆれ出した。

午後一時四十五分、昼食。ゆれている長い通路を一人でふらふらと食堂へ行き、隅の楽そうな席をとった。リーダーの松田教授が入っていた。テーブルにつかまり、椅子に手をかけつついらした先生を「何卒」とおよびした。平凡社の方もそこへ席をとり、食事をした。ここが三日の食卓にきまるとは、船は初旅の私には一つの経験であった。主人は出て来なかった。

五時、お茶の時間。同じ部屋の御夫婦と早速固形燃料でお湯をわかし日本茶をのむ。

八時十五分、夕食。夜ダンスパーティー。みていると

身体がゆれて来る感じ。一人立ち二人立ち、だんだん部屋へかえろうといい出し、たちまち人が減ってしまった。

十時、時計を一時間進める。夜半……波高し。

二十二日。日本本土に沿い北上。午後四時頃津軽海峡へ差しかかる。静かになった。七時頃より荒れ出した。

日本海に入ったらしい。ものすごい波のうねりで丸窓が明るくなったりかげったり。皆ベットに入ってたまま、とても歩けない。夕食ぬき。ギ……パリ……ザ……。はき気こそしないが恐ろしくてねられない。頭の方が上になったり、下になったり縦横にもまれる。時々つかまりつかまり廊下へ出てみる。セーラー達が二人タバコをくわえ、笑い顔もみせず足早に通って行く。様子をききたくも英語は全然分らない人達である。暫く階段にペタンと腰をおろしていた。松田先生がフラフラと出ていらして「いけませんな。こんなひどいのは初めてです。」何度もソヴィエートへいらした先生のこのおっしゃり方は私にはショックであった。外人の若い人がお手洗いのドアの前へペタットすわって「船よい船よい」と英語でいいながらフウフウ苦しんでいる。誰でもよい。笑みをたたえた人間の顔がみたい。でないとなった一人で木の葉

のような船にのっているかのような孤独感で何んともいえない恐ろしさであった。

二十三日。まだ波はものすごい。朝食もぬき、おながすいていた。通りかかったメイドに手ぶりでパンを所望。お湯をもらいお茶をのみ、味のない朝食、口がばさばさする。神経の疲れで口がかわく。「梅干だ！」思い出して四人で一なめ二なめ。何んとおいしかったろう。四時にナホトカ着というのがせめてものの心の張りであったのに、十時着と知らされヤレヤレ。

うっすらとソ連の山らしきものが見え出した。気のせいか波も少しおさまったようだ。新鮮な外気にふれた。コートをはおりよろよと甲板に出てみた。「あー助かった！」だんだんと波の静まる海をみて安心感に胸がふくらむ。

十時過ぎ、七時間近くおくらせてナホトカ着。順々に部屋に税関吏が入って来る。ふと若い税関吏が他の部屋がすんだ為か私達の部屋へ入って来た。書類を出し、最初に私が答えることにした。「ペラペラペライエス？」そのイエスのいい方が一寸ちがっていて、思わず「イエース」と出てしまった。「イエース？」又ききなおし、笑みをたたえた顔が引きしまるのを見た私はひらき直って

「ゆっくりと話して下さい」というと、「貴女はソヴィエートマナーをもっているか、イエース？」このイエースのつかい方にひっかかったのだ。私は目を丸くして「ノウ、ノウ、何んでソヴィエートのお金をもてますか。ナホトカで両替するのです」というと、「そうでしょう。これでよいです」といって、どうなることかと心配顔をして立っていた三人共、ほっとする。

次々と同じ質問、そばで今度はその人の英語になれたので、通訳も楽に出来た。「何卒おりて下さい」と、立ち上る税関吏に「イエース」につられて「イエース」なんていって、ドキンとしただけにあまりあっ気なく終わったので四人共急に顔がほころび、待っていた荷役人夫に荷物をあずけ、タラップを降りたのである。

バスが何台も待っている。そして駅へはこぼれる。真夜中の駅に立派な列車が我々を待っている。車掌は女の人ばかり。防寒着に着ぶくれ、はく息ばかり白い。

二十四日。午前二時半発車。ヤレヤレと横になったものの、ねがえれば落ちるようにせまいベット。上段でねる男の人二人は「身体をしばってねないと落ちますよ」とこわごわ上へのぼる。

目がさめた。七時二十分。丁度朝日がのぼるところで



(ハバロフスクの日本人墓地)

あった。雪が氷りついたシベリア平原、五時間しか眠らない目も寒々しいシベリアの風景に見入る。ボツボツと平家建の家が見える。防寒設備は？ と考えざるを得ない位の家々である。

九時朝食。例の小型おやかを下げて行って、お湯をもらいお茶をのむ。乗り込んで来ていた通訳の人に「お湯を下さい」と、ソヴィエト語で書いてもらった。朝鮮出身の人らしい。仲々の紳士であった。この一片の紙がどんなに役立ったことだろう。

午後四時、ハバロフスク着。

ここで百名余りの見学団員はAとBに分かれ、B班はホテルで小休止して、モスコへ向うのだ。再び会うのはここ、ハバロフスク。私達と逆コースをとるのであった。

二台に分乗した私の方はA班の一班。旅行中行動を共にする方々である。何の前ぶれもなく通訳の人がのりこむと「市内見物にまいります」と、日本語も板についている。ホテルで休めると思っていたのに、がっかりしてしまった。

日本人墓地へ車はのり入れる。一尺以上の雪に一面真白。降りてみるとスカスカとしていてぬれない。住職はお袈裟等をスーツケースに入れてあった為出すことができない。でも墓標の前で読経。女の人がすすり泣いている。誰方も主人を坊さんと知らない。涙がにじんでくる。あちこち雪に埋れてみえないが、それらしき石の形のまま雪に覆われているお墓々々を合掌して通る。

バスへのりこむと主人の隣りの席の男の方が涙をしきりにふいておられる。通路越しに私に「この方のお兄様がここに入っておられる」と話してくれる主人。私は何ともいえない感じで身体をのり出し、「私の主人は住職

です。今お経をよんで来たお坊さんと偶然、席をとなり
にされたのも仏縁でしょう。お兄様も満足されたことと
思います」と、おなぐさめに何かいわずにはいられな
かったのである。

初めて言葉をかわすその方は「父母や家中の者を代表
しておまいりに来たのに雪が深くて」と、それでも少し
悲しみが薄らいでこられた感じで、静かにそう話され
た。仏縁を泌々と感ぜざるを得なかった。このことを家
で書く時、私は涙が出るのを禁じ得なかった。

ウスリー地方の上流という、広い広いアム河も氷結し
て、バスから降りた人達も飛んで行って歩いている姿が
見える。そして疲れきった私達はようやくにしてホテル
についたのである。我々にはナホトカといい、ハバロフ
スクといい暖かい気持にならざるを得ない。

翌日はA班はシルクロードへと向け南下するため、七
時には出発の用意をしなくてはならない。一昼夜もまれ
ぬいた船から、夜中に汽車にのり七時間もおくれた午後
四時頃ハバロフスクへつくやいなや雪の市中見物。明日
は一日飛行機でタミケント、沙漠のオアシスへ行くの
だ。早く寝て疲れをとらなくてはと、ベットにもぐりこ
んだのであった。

(続く)

話しのくず籠

この大自然の中に存在する私達は常に自然の偉大な力
によって哺まれている。六月に入ると、うっとおしい毎
日が続く入梅を迎えるのですが、また、この入梅は私達
に恵みも、もたらしてくれます。

入梅期に入ると農家の人々は、いっせいに田植えを始
めます。今日では農業も機械化が進み、科学的な農作方
法がどんどん取り入れられておりますが、あちら、こち
らで行なわれている田植えの姿には、どことなく昔なが
らの風情と生活への意欲的な姿が感じられます。

昔から田植えには、自然の恵みと、神への豊作を願っ
て田植え祭りが行なわれ、秋の収穫期には、黄金色に
穂った、神からの賜り物に感謝して豊作祭りが行なわれ
ます。このことを思うに、入梅期の雨によって稲は生命
を与えられ、夏の強烈な太陽のエネルギーにすくすくと
育つ稲を見ると、我々の祖先も、今日の我々も同じよ
うに大自然の恵みに対して感謝の気持を起すのは、人間
の純粋な心持ちだと思われます。



可能性について

小沢 憲 珠

(東京都八王子市極楽寺中)

私たちすべての人々は仏になりうる可能性を持っているといわれています。ところが私たちは日常生活を送るうえでいろいろな迷いにおおわれているために、それに気付かないことが多いのです。

これについてしばしば次のような譬喩がなされています。色あせた醜く萎んだ蓮華の花弁の中の如来・蜜蜂の群がりの下の蜜・精製されない穀殻のままの穀物・汚物の中に落ちてゐる黄金・貧家の地下にうもれている宝像・外皮におおわれている種子の芽・ぼろぼろの悪臭を放つ衣をまとった金像・貧しく財しい女が懐妊している国王・外面が黒土に覆われている宝像といった譬喩であります。(如来蔵經)

心の内部にせっかくの宝物を持っていながら、それを覆っているいろいろな汚れや迷いのためにそれを見ることなく、一人悩みつづけるということになるといえましょう。私たち

の日常生活は往々にしてこのような状態ではないでしょうか。

導師と呼ばれる人々、あるいは宗祖と仰れている方々は、私たちが気付かず持っている能力を目覚めさせ、そのまま埋れてしまわないように導いて下さるわけです。導師に関して次のような話しが伝わっております。

ある一人のパラモンが世尊ゴータマに、多くの弟子たちは世尊より教えを受け、それらの人々は皆涅槃を得ることができるのでしようかと質問した。すると世尊は、

「パラモンよ、わが諸々の弟子たちのある者は、このように教諭せられ、このように教誡せられ已って、究竟趣たる涅槃を得る。しかしある者は得ず」

と答えた。パラモンがその理由を問うと、世尊は王舎城への道に迷っている人に、私が懇切に道を教えたとしても、教

えられた通りにそこへ行く人もあれば、間違えて行き着かない人もある。しかし王舎城そのものはあるのだといい、

「あたかもこのように涅槃は正しく存し、涅槃に導く道は存し、我もまた導師として有る。しかもわが諸々の弟子たちは我にこのように教諭せられ、このように教誡せられ已って、あるものは究竟趣たる涅槃を得、あるものは得ず。バラモンよ。これを我はどうすることができようか。バラモンよ、如来はただ道を教えるもののみなのだ」

(中部經典算教家目鍵連經)

と結んでいます。

仏になりうる可能性、そのありかを教えてくれるのが導師であります。しかし導師は道を教えてくれますが、そこへ連れて行ってはくれないのです。そこへ行くのは一人一人の努力によることを教えています。

また人には人それぞれの能力があります。すべての人が同じ道を歩むことはできないかもしれません。生れつきの能力、育った環境、友人からの影響などにより、適不適がでてくるでしょう。仏教にはいろいろな道が説かれていて、浄土教の中にも父母に孝養をつくし、師長に奉事するなどの十善業や五戒、観想の念仏、称名の念仏などがあります。また最も能力のすぐれたものには、仏教はおろかささまざまな哲学や

思想、論理学、文法学、医学的知識、世間一般の工業的知識など幅広いオールマイティーなものを学ぶ道もあります。

このように道が多ければ多い程、自分の選ぶべき道に迷いができ、また自分の能力に対する自覚が必要になってきます。そこにおいてもまた導師の役わりが重要となります。師はこれから仏道にころざす人に対して口述試問を行なうのです。その人に対していろいろな言葉を投げかけ、いろいろな道を説きます。するとある面には不信を抱き、後込みを感じずるでしょうし、ある面には信心を生じ、喜びを起すでしょう。このようにして導師は未発心の人の進路を決定します。

(瑜伽論)

宗祖と仰れる方々は自分自身の自問自答においてこの決定をなした方々ではないでしょうか。法然上人もその一人でありましょう。多くの書を読み、多くの人々の歩んだ道を見つめ、そして御自身の能力を深く観察し、そこに称名の念仏の一業を選択されたのです。私たちがその教えにふれ、そこに喜びを生ずるならば私たちの道も決定するわけです。

人は誰でもこれから果実の実るべき種子を持っていることを教えられ、それを実らせることのできる方法を教えられ、その自覚に足を踏えて、初めて菩提の道への発心がなされるといえましょう。この芽を発芽させることができるのは自分

自身の努力によるわけですが、それにはいろいろな縁に遇うことが必要とされます。

次にあげる五点は自分自身にきびしさが欠け自覚のない人といえるでしょう。つまり実りを得ることができない人です。

- (1) 自分にも他人にも恥ることなく悪を行なう。
 - (2) 涅槃の功德を聞いても、それを願わない。
 - (3) 正法を聞いても、それに発心せず、信じようとししない。
 - (4) 外面的のみで、中味のともなわない仮相の出家の人。
 - (5) 少しだけの善行から過大の果報を得ようとする。
- また次の四点は条件がそろわないために実りが得られない場合といえましょう。

- (1) 善友が無顛倒の菩提の道を説くのに会わない。
- (2) 善友を得ても、顛倒して学修する。
- (3) 善友を得、無顛倒に学修しても、怠惰である。
- (4) 善友を得、無顛倒に学修し、精進しても根が熟せず、資糧がともなわない。(瑜伽論)

これらの中で実りあるものを得るための一つの重要なポイントをなしているのが、善き友を持つということです。善き友を持つということ、それ自体の性質としては、戒が保て、慈悲心を抱き、倦怠がなく忍耐力があり、恐怖心がなく、よ

く正法に接することができるとなどが必然的に備わることができることであると説かれています。

世尊の弟子アーナンダは師にこのように尋ねたことがあります。

「大徳よ、善き友、善き仲間とともにあるのはこれ梵行の半なのでしょうか。」

すると世尊は、

「アーナンダよ、この言をなすなかれ。善き友、善き仲間とともにあるのは、これ梵行のすべてである。……アーナンダよ、我を善き友となすが故に、生法ある衆生は生を解脱し、老法ある衆生は老を解脱し、死法ある衆生は死を解脱し、愁・悲・苦・憂・悩法ある衆生は愁・悲・苦・憂・悩を解脱す。アーナンダよ、この理によって知るであらう。善き友、善き仲間とともにあるのは梵行のすべてであることを。」(相応部經典四五、二)

と答えています。つまり善き友を持つということ、それが仏道のすべてであり、それが仏道を歩みだす第一歩でありましょう。浄土門であれば念仏を教えてくれる人、念仏を実践している人とともにあることが重要なのです。ちょうどそれは非常に香りの良い花がたくさん咲いている森に入れば、その外の香りは嗅ぐことのできないのに似ているでしょう。

十二因縁

—その6—



妄念の中の念仏(触)

渋谷 賢 応

(長野県茅野市心光寺住職)

六入は六つの心の窓、眼には色、耳には声、鼻には香、舌には味、身には触、意には法と相応せしめられていることは前に学びました。この六入から触、受、愛、取、有の六つの概念が、連続した心理的慾望の複合他の因果として一括了解せらるべきものであることも前に申し述べた通りでございます。

お釈迦さまはこの十二因縁の中の六概念、つまりその半数をこの心理的慾望の過程に費やされているのです。それだけにこのことは人間の本性を抉った赤裸々の人間性の追求と申さねばなりません。主観たる六根と、客観たる六境が、ただ

そのままの姿に置かれてあれば問題はないのですが、それが接触することによって種々の問題が惹起することを思うとき、この触を出発点として、受、愛、取、有とつぎつぎに煩惱の奥底に食い入っていく迷界の相が如実に示されていると思うのです。

長阿含経(大縁方便経)には次のように論されています。

「阿難よ、もし二つの木片があつてたがいにすり合つたとしたらどうだろう。そこには今までに考えても見なかつた火の性が生ずるではないか。もしそれを別の所に置いたなら火の出るようなことはないであろう。そのように楽しみの触れ合いには楽しみを生じ、苦しみの触れ合いには苦しみを生ずるばかりでなく、心に触れることによって身に触れることを願ひ、それによって生老病死の苦悩を受ける結果にさへなるのだよ。これは有為にして無常、因縁によって生ずる所なのだよ。」

とくわしく説かれておられるのです。

人は個体ではありません。個体では生きられないのです。

触とはその個体と個体とを結ぶきづなです。現今の社会に於て、心の触れ合いがないと言うことが、どのようなゆがんだ結果をもたらしているか、その意味からすればこの触は重大な社会是正の要素とも考えられるものなのです。しかるにお

釈迦さまはあえてこの触を、煩惱の行動に發展する起点としてとらえておられるのです。そこには、迷界の根元たる無明を基盤として考察せられるお釈迦さまのきびしい姿勢があるわけです。たしかに触れることによって火を生じます。しかしながらこの火は、接触した個体を焼きつくす火であってではないのです。

○

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔、一人の男がありました。旅をしていて大變のどが渴いて歩いていると路傍に木の筒がありきれいな水が流れこんでいました。すぐさまそれを飲み、飲み終って満足しました。そして木の筒に向ってこんなことを言いました。『俺はもう飲んでしまったんだ、水はもういらないんだ。もう流れてこなくていいんだ。』こんなことを言っているうちにも水は容赦なく木の筒に流れ込んでいます。『俺はもう飲み終ったというのに何んだって流れるんだ』傍で見ていた人がその男に申しました。『お前は馬鹿者だ、全然智慧がない。お前は何だってここを去らずにいつまでもわめいているんだ』そう言いざまその男を引っぱって行ってしまいました。」

その後、お経には次のように解説しておられるのです。

「世間の人もまたそのようなものです。生き死にや、渴きに

似た愛慾のために五慾の塩水を飲んでいきます。すでに五慾のために疲れはてることはあの男の水を飲み足りたと同じです。そこで次のように言うでしょう。『美しい異性の色、異性の声、魅惑するような異性の香、異性の味、とろかすような感触、もうそんなものには用はない。』けれども五慾はお盛んにその人をせめます。これを知ってその人は怒りの声を立てます。『立ち去れ、どうしてそんなに俺をせめるのだ』その時智慧ある友がこの人に申しますには、『あなたが五慾から離れたいと思うならばあなたの六情、眼耳鼻舌身意を摂しその心意を閉すより方法はありません。妄想が生じなければ解脱することもできるでしょう。どうして外にばかり慎りをうったえるのですか。どうして内を省ることをしないのですか。かの水を飲む男と同じではないですか』と」

六情を摂する心、これを以て外界に接触してゆかねばならぬ。それは六境たる対象を殺してゆけということではない。ましてや六根たる主体を殺せということでもない。その中には六情にわざわざいされない、自然の素直な姿がなければならぬ。ないわけです。

法然上人の御伝の中に次のような上人と明遍僧都との問答の条がございます。

上人天王寺におはしけるととき、僧都善光寺 参詣の事あ

りけるが、たづね参ぜられて、まづ使にて案内し給ふに、上人客殿に出まふけて「これへ」と仰せられける。僧都さしいりて、いまだ居なほらぬほどに「このたびいかがして生死をはなれ候うべき」と申されければ「南無阿弥陀仏と唱へて往生をとぐるにはしかずとこそ存じ候へ」と仰せければ、僧都申さるるやう「たれもさは見をよびて侍り、ただし念仏のとき心の散乱し、妄念のおこり候をばいかがし候べき」と、上人のたまはく「欲界の散地に生をうくるもの、心あに散乱せざらんや。煩惱具足の凡夫、いかで妄念をとどむべき、その条は源空もちからおよび候はず。心はちり乱れて妄念はきおいおこるといへども口に名号をとなへば、弥陀の願力に乗じて、決定往生すべし」と申されければ「これうけ給り候はんためにまいりて候つるなり」とて、僧都やがて退出し給ひにければ、初対面の人、一言も世間の礼儀の詞なくして退出せられぬることよとて人々たうとびあひけり。さて上人うちへいり給ひて、「心をしづめ、妄念おこさずして念仏せんとおもはんは、むまれつき目鼻をとりはなちて念仏せんとおもはんがごとし。あなこごとし」とぞ仰せられける。

お念仏を申すその時において起る妄念をいかにするかと言

う明遍僧都の問に対して上人は素直に

「その条は源空もちからをよび候はず。」

と言いはなれたれた一言は、どれ程僧都を驚かし、かつ奮い立たしたことでしよう。しかし上人にとっては、ご自分の心をそのままに申されたまでにすぎないこと、往生、生死の一大事は、妄念のあるなしなど問題ではなかったのでしょう。そして僧都を送って自室に帰られた上人がつぶやかれた「心をしづめ、妄念をおこさずして念仏せんとおもはんは、むまれつきの目鼻をとりはなちて念仏せんとおもはんがごとし。あなこごとし」と言われたこのお言葉に千金の重みを感じます。

○

五境に五根が触れることは目鼻あるものの自然の理です。これを否定しようとしても、所詮無理なことと言わなくてはなりません。だからこそこの自力の摂心を仏の本願におまかせして本願の念仏におすがりすることの尊さを知らなければならぬのです。

それにしても、あの偉大な法然上人がやはり私と同様、妄念の中に念仏を申しておられたのだとは、信ぜられない程尊いよろこびでございます。



死 と 愛

——或る青年の不慮の死に思うこと——

長谷川 昌光

(横浜市戸塚区光安寺住職)

「早くも水の犠牲者がありました。三日連休の第一日目の憲法記念日の今日午前十一時五十分ごろ、鎌倉市七里ヶ浜海岸沖六十メートルで泳いでいた横浜市戸塚区平戸町の工員山

中一男さん(二一)は潮に流されおぼれ、今年の湘南海岸の初の犠牲者となりました。七里ヶ浜海岸は、潮流の変化が激しく、沖合に出ると海岸に泳ぎつくことが困難なため、鎌倉市では遊泳禁止区域に指定していた所です」

久しぶりの休みにラジオを聞きながら本棚の整理をしていた時、こんな放送が耳に入りました。

最近、私の住む町は宅地造成のブームで見知らぬ人々が多くなりましたので、山中さんといわれても同じ町内に住みながらピンとはこず、本の整理をすませ、家族と夕餉の食卓をかこんでおりました。

その時、玄関先に見知らぬ老婆がたずねてまいりました。が、ことば少なく、しかもとぎれとぎれで一向に要領を得ないのです。そのはずです。その老婆こそおぼれ死んだ山中一男さんのお母さんだったのです。病床に臥す夫にかわり、変りはてた息子の検死に立ち合い、今は話すことのない一男さんと家に帰り、その足で私の寺へまいったのです。

あまりにも突然の死、今朝はいつもと変りなく、笑顔で出かけて行ったのに、こんな姿になってしまって、何が何んだか分からなくなってしまいました。と話すお母さんの痛々しい心持ちに触れ、何んともいえない気持がよぎったのでした。楽しい筈の休日が一瞬にして奈落の底に変わってしまった山

中御一家。それでも弔問に見える友人や近所の方々に相對し、五日の葬儀までは型通りに取り行なわれたのです。

その後、いくらかは平生の氣持を取りもどしつつある御両親にお会いしたのは九日の初七日の日のことです。この日、少しでも悲しみをやわらげようということで、お骨を一時寺にお預りすることになっておりましたので、山中家へ出向き初七日忌の回向を手向けたのです。

病床に臥す父親は以前にも増してやつれ、落胆している様子が手に取るように分りました。床に臥したまま、涙ながらに話しかけてまいりました。

山中さん御一家は一男さんを末っ子に三人姉弟で、上のお姉さんはすでに嫁ぎ、二児の母親、下のお姉さんはこの秋に結婚なさる由、御両親にとって一男さんはそれこそ最後のたのみだったのです。三年前に住みなれた茨城県をあとに当地に住居を新築したのですが、高校を卒業したばかりの一男さんは茨城県での某工場での半年間の勤めを辞め、家族と一緒に当地へ、途中入社のため臨時雇いながら住友電工に再就職し、この四月から正社員として採用され、責任ある部署に配置されたばかりだったのです。

「病氣がちな私にかわり、まだ若いかもしれないが一家の大黒柱になるんだと、張り切っていた一男がこんな姿になっ

てしまつて」

と、話す父親。そばから母親が加えて、

「あの日（三日）、本当は久しぶりに遊びに来ていた姉の子供を連れて行くことになっていたのですが、当日になって何やかや理由をこじつけ、一人で家を出ていったのです。多分子供連れでは存分に楽しめないと思ったのでしよう。今いえば愚痴ぼくなりますが、もしあの時、子供を連れて行っていれば海へ入ることもなかったでしょうし、死ぬこともなかったのではないかと、ついつい考えてしまいますよ。でもあったことは仕方ございません。何をいっても一男はもう帰ってはまいりませんからね」

生前中一男さんがかわいがっていたというセパードが、今はもう帰らぬ人となってしまうた主人の姿を求めてか否か、縁先でクンクンと啼いている、動物といえども人の悲しみが分るのだろうか、ここ二、三日あまり元氣がないという、そんな情景を見つめながら、御両親は淡々とした中にも悲しみをこめて話しかけてくるのでありました。

病氣のお父さんを留守居に残し、お母さん二人のお姉さん、それに親戚の方々に守られながら、今は亡き一男さんは、わずか三年あまりの生活ではありましたが、数々のたのしい思い出を刻んだ我家をあとに寺へ向つたのでした。

◇ ◇ ◇

人としてこの世に生れ出でる限り、いつかはこの世を去らねばならない。このことは、取立て筆にすることではありません。ごく当り前のことなのです。しかし、平生私たちはこの死ということにあまりにも無頓着すぎないでしょうか。

生きること自体、それは大変なことですから死ぬということとは、それ以上に変なことではないでしょうか。「飛ぶ鳥あとをにごさず」などといわれておりますが、後悔のこすことなく死んでいった人がどれ程おりましたか。死した後、話すことはできませんのでその悔あるか否か分るすべありませんが、残された家族の方々の口より愚痴話がでることをよく聞きますと、死んでしまった人として往生の疎外を遂げることはできないでしょう。ましてや今回の山中一男さんの場合のように、ようやくにして一人前に育てあげ、より大きな実をみのらせようという矢先の死、御両親には遺場のない死となってしまうのです。一男さんとして無念であったでしょう。

身体が丈夫であり、仕事も順調に進んでいる、こんな時、人は自分は誰よりも仕合せであり、恵まれていると考えます。けれどひとたび病いにおかされたり、仕事が苦しくなくなると沈みがちとなり、それまで予想だになかった悪い面

のみを考えてしまうのです。この最悪の場合が死という行動になってあらわれます。

絶えず自分の最悪の時点を考える、もしそうした立場になった場合、冷静な気持でその場を切りぬけることができるように心がける。こうした心情を平生より持ち合わせることであればそれにこしたことはありません。

それではそうした心情はいかにして育てあげることができのでしょうか。いうまでもありません。自分自身を大切にすること、自分を取りまく人々を大切にすること、これ以外にはないと思います。この世に「自分」という人は一人しかおりません。日々の自重自愛の生活が最も大切なものとなってくる訳です。それと共に互いに助け合い生活する他人を敬い、理解し合うことも必要でしょう。こうした素直な日々の行ないがあればこそ、いざ苦境に立たされても、自身で解決もできましょうし、他人の助言も数限りなく愛情あふれる手がさしのべられる筈です。

死、それはいつどのような形となって私たちにふりかかってくるか分りません。このたびの山中一男さんの不慮の死を通じて、唯一つしかない自分の命の大切さ、ありがたさを泌泌と感じ、今後とも悔なき人生を送れるよう、一日一日を充実したものとできるよう感じとった次第です。

教団は和合を生命とする

—— 怨みは長く続かせるな

友情は短かく急いで破滅するな——

広瀬 了義

(淑徳与野高校名誉教長)



血は血によって浄められるものでない。怨みは怨みによって報いられるものではない。ただ怨みを忘れることによってのみなくすることができぬ。

昔、長災王が隣国の兵を好む梵達王に国を奪われ、妃と王子は共に隠れているうちに敵に捕えられたが、王子だけは免れた。王が刑場の露と消える日、王子は王の命を救う機会をねらっていたが、遂にその折を得られず無念に泣いて、父の哀れな姿を見守っていた。王は王子を見つけて、誰にいうとなく、

「長く見てはならぬ。短く急いではならぬ。怨みは怨みなきによってのみ静まるものである。」

と、独語の如く呟いた。この後、王子はただ一途に復讐の機会をねらっていることに、幸いに王家に雇われ、王に接近し親しまれていた。

或日、王は猟に出かけ、王子も伴った。王子は日頃の目的を果さんと決心、王が軍勢と離れ、山中をかけまわるうちに疲れ、王子の膝を枕にまどろんだ。今こそと王子は刀を抜

いて王の頸をかき切らんとしたが、その瞬間に父の臨終の語が蘇って手が動かない。幾度か刺そうとためらっているうちに王は全身に冷汗を覚え、驚き眼をさまし、いま長災王の王子に頸を刺されんとする夢をみたという。この時、王子は何かに感動したか、刀を捨てて王の前に跪いた。その時、王も長災王の臨終の語を聞いて、互いに罪を詫びて許しあい、王子にはもとの国を還し、その後、両国は永く親睦を深めた。

ここに長く見てはならぬとは怨みは長く続

かせてはならぬ。短く急いではならぬとは友情を破るに急ぐなどは和合の教団には、常にこの精神を体現して欲しい。お互いに立派な国際的、国家的社会人たる有為の人であつても、僅かな感情、利欲の念などに迷わされ、政見・学殖・経験・教養などの豊かな持主で

ありながら、裏面での醜い競争心や嫉妬のために同志を裏切り、折角の長い間の親交も、一時の誤解などで、これまでの美しい貴い関係を惜気もなく破棄し、あたふ双方とも国家、社会などのために挺身すべき使命を忘れてしまうことは遺憾千万。

もっとお互いが雅量をもって人を推し、自らも反省して、教団本来の目的達成に精神を期したい。(備考―「新訳仏教聖典」語録より一部抄出)

《ハガキでひとこと》

梅雨によせて



感謝

星崎三郎

(浄土宗檀信徒評議員
神奈川県小田原市在住)

今年も毎年のことながら、水無月を迎えたが、六月二日は恩人の誕生日である。

その恩人も四年前にこの世を去った。

恩人は、毎年誕生日には盛大にお祝いをされ、『祝いは、人生のけじめをつける意味で

もよいことだ』と言われた。

非常に信仰心に厚く、生家は曹洞宗であるが、宗派にとらわれず各寺院に参拝され、京都をことの外、愛された。

生前中、自分の墓を造り、生家(百坪)は、寺の庫裏に移築し、本堂及び備品、念仏堂、梵鐘、鐘楼を寄進した。

吾々にも、各寺院の参拝、祖先の法事、墓参をするよう強く言われた。

又、小生の亡父は、毎日、仏壇に参拝し、祖先が小田原藩より貰った免状(お前は親孝行であった。その親の死後、度々法事を行なった。依って苗字帯刀を許し、米三俵賜う)を床の間に掲げ、感謝していた。

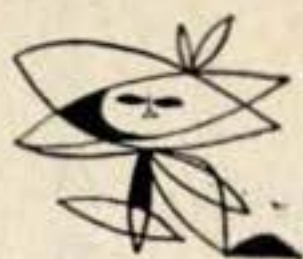
この様な環境に育った小生が、現在、菩提寺の総代をし、総本山、大本山に度々お参り出来る機会を与えられて居ることに、感謝する様になった。

そして、去る五月七日、小生の還暦の際

は、大勢の方々から祝いを受け、なごやかな、すがすがしいひとときを、小生の人生に送ることが出来た。

思うに、人間は、ほんとうに、環境に支配される弱いものである。

この度、元祖、法然上人の開宗八百年忌を迎えるに当り、徳川時代より特別の庇護に馴れ過ぎてゐる環境より脱皮し、僧俗一体となり、この憂うべき世の中に立ち上る時ではないだろうか。



ノーベル文学賞受賞者川端康成氏と

おかげさま

細田隆善

(東京都江東区勢至院住職)

昨年十二月十日、スエーデン、ストックホルムにおいて、わが国ではじめてノーベル文学賞が川端康成氏に授与されました。東洋でノーベル文学賞をうけましたのは、インドの詩人タゴールだけでした。さきに湯川博士と朝永博士が物理学上の功績からノーベル賞を受けましたが、ノーベル文学賞の受賞は今回がはじめてのことであり、わが国文学史上名誉あることです。

ノーベル賞というのは、ダイナマイトの発明者であるスエーデンのノーベルがばく大な遺産をのこし、毎年世界の物理学、化学、生物学、医学、文学、世のためにつくした人に対して、功績を賞し賞金をだすことになったものであります。ノーベル文学賞をうけた従前の例からみますと長編の文学がおおいのですが、今回の川端氏のは比較的短い作品で受賞されたものであります。

川端氏は明治三十二年大阪に生れ、六十九歳、府立茨木中学校を卒業し、一高、東大文学科に学び、大正十三年卒業後、文筆生活に入り、戦前は伊豆の踊り子、雪国などの代表作があり、戦後は古都、千羽鶴などの作品が有名です。川端文学は外国文学の亜流でなくわが国の伝統美をバックボーンとして、王朝文学の流れをくみとり、独特の艶麗な筆致によってえがかれているものであります。

氏はまた東洋思想の研究家であり、仏教思想に造詣のふかい方でもあります。このことを作名の中からうかがうことができます。川端文学はとくに日本人の心の精髓をすぐれた感受性をもって表現したことが世界の人々にふかい感銘を与えたといわれています。

ノーベル文学賞受賞のしらせが川端氏のところにとどいたのは、昨年十月十七日のことでありました。当日いちやくこの朗報をききつけた新聞記者、報道関係の人々が鎌倉の川端邸にどっとおしよせ、平素しずかな川端邸はときならぬさわぎとなりました。

このときおおせいの報道関係者をまえにして、川端氏がつぎのように挨拶をされた内容が、まことに意義ふかい言葉でありました。

「わたくしは今回はからずもノーベル文学賞受賞という破格の光栄に浴することになりました。このことは実は三つのおかげさまのたまものによるものであります。

第一のおかげさまというのは、日本の伝統というものがあり、これを作品に生かしたからであります。」とかたられました。

日本には奈良、平安のむかしから伝統のあ

る日本文学があり、世界的水準のたかい文学として世界にいられています。また文学だけでなく、日本にはかがやかしい文化の数々がうけつがれ今日生きています。このことが川端文学を形成したものであると謙虚にかたつておられます。戦時下、生活不便なときにあっても、川端氏は源氏物語の研究につとめ、このことが戦後の作品におおきな影響をあたえています。

「第二のおかげさまというのは、翻訳者がよかったおかげです。日本語で審査してもらったら、なおよかったかもしれません。」といっておられます。日本語ほど複雑微妙な言葉はなく、外国の人々にわかるように翻訳することは大変むづかしいことでもあります。作家の井上靖氏が「川端文学は文章が非常に日本的で、しかも個性がつよく翻訳がむづかしいので、はたして欧米の人たちにわかつてもらえるかどうか心配である。」といっておられるように、とくに川端文学のように言葉に微妙なニュアンスのある小説を外国人に理解してもらうように翻訳することは至難なことでしたが、りっぱに訳していただいたことが

受賞の原因でもあらうかと川端氏は謙虚にかたっておられます。

「第三のおかげさまというのは、三島由紀夫君のおかげです。三島君はノーベル文学賞の候補にあげりましたが、三島君は若いのでわたしの方に受賞のオハチがまわってきたおかげです。」と川端氏はかたっておられます。

三島氏は「川端先生の弟子としてこのたびの先生の受賞はうれしくてしようがありません。西洋が日本の文学の本質を再認識したのであります。」とかたっておられます。川端氏は先輩であるわたくしに受賞のオハチがまわってきたのであると、謙虚にかたっておられます。

このように受賞の意義を三つのおかげさまのたまものであると謙虚にかたっておられます。心こそ、知恩の心であります。おかげさまというのは自分だけがえらいとする高慢な心と対象をなすものであります。自分が今日あるのは自分をはぐくんでくれたおおきな恩恵であるとする知恩の心こそ、人間として大切な心であります。浄土宗の総本山知恩院の寺号は、「知恩」、おかげさまという意味をもった本山の名称であります。

仏事の心得とお作法

第一回



合掌と礼拝について

福西賢兆
(大正大学実践仏教講師)

浄土宗の合掌と礼拝についてお話しいたしましょう。それは、御本尊阿弥陀如来の本願の力に、全ての生きとし生けるものが、生き生きと共に生かされていることに気がついて、毎日感謝の心でお念仏を称えながら生活することであり、その根底には、阿弥陀仏に対する深い信仰と帰依の心によって培われた信心のまことに深いものが根をはっており形に表れたお作法としては、合掌と礼拝があります。

お経の中には合掌と礼拝について、次のように説かれております。浄土宗の正依經典は、無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の三経

で、これを浄土三部経といい、その内で最も長い大きいお経は無量寿経です。無量寿経序分に、釈尊の御眼、御耳、御鼻、御口、御身の御様子がみ心になつており、御姿は清らかに、御顔は輝くばかりでありました。そこで阿難尊者は席から起つて右の肩をかたはぎ脱ぎ、両膝を地につけ、跪ずいて合掌を申し上げました。又、下巻には、釈尊の御勸誡の後、阿難尊者は席を起ち、更に衣服を整えて合掌し恭敬して阿弥陀仏を礼拝するようにとの御教示に従つて、身を正しく面を西にし、恭敬し合掌して五体を地に投げて、阿弥陀仏を礼し奉りましたと説かれています。

中国浄土教の高祖善導大師(六一三―六八二)御作にかかる六時礼讃には、我今稽首礼、南無至心帰命礼とあり、観経疏という御書物の中には、帰依合掌礼と書かれており、宗祖法然上人は二十才の御時より、偏に善導大師に帰依して、六時礼讃を唱え、三部経を誦誦し、お念仏をたえまなく称えられました。信仰生活の具体的実践行として、第一に合掌と礼拝であり、更に進んでお念仏を称えるようにいたしましょう。

次は合掌の作法についてお話しいたしましょう。合掌の作法は、両方の掌を正しく合せ、胸の前に置き、上体は腰をのばして胃を折

らないようにして下さい。これは、立っていても坐っていても同様です。両掌の指先は、斜め上方になることが正しい位置であり、両肘は張りすぎず、脇にくっつけすぎず自然体を保つように心掛けます。両肘を張っていると肩が凝り、声が出ません。気持のゆるみは、指先が下ることと解ります。気持を引締めて身体を自然にすることです。この合掌の作法を賢実心合掌といいます。

次に観無量寿經第十六観に「合掌叉手称南無阿弥陀仏」と説かれている叉手合掌があります。これは、右指の第一関節を左指の第一関節の上に重ねる方法で、両掌は賢実心合掌と同様に賢く合せます。指先を深く合せたり、指先を折るのは作法に合っていません。以上の二種類がありますが、同行と共に合掌する時は賢実心合掌を行って下さい。

ある布教師さんのお話しを承った時「皆さん掌を仰向けてごらん下さい。掌のシワの多いこと。そのシワとシワとを合せるとシワ合せ（幸）がやってきましたヨ。或程反対に甲を合せると節合せ（不幸）だ面白い語呂合せですネ。信心の固っていない人には、信仰導入

のアプローチとしての笑話です。

次は礼拝の作法についてお話ししましょう。合掌をする礼拝をすることを威儀法と専門的に申します。節度のある行動、威儀を整えるということとで禅宗では、威儀即仏法といつて細かい儀式の規則を定めています。

浄土宗の威儀法礼拝の作法に上、中、下、三種を定め、上品礼、中品礼、下品礼といつております。

上品礼は、五体投地接足作礼さらいといつて、両膝、両肘、次に頭を低く下げ額を床につけ、両掌を仰向けて、両耳の辺りまで掌を上げ、ややしばらくそのままです。これは、御仏のおみ足を頂くという意味で最も敬意を表す作法であります。

チベットの仏教では、数キロに亘るお寺の周囲を五体投地の礼拝を行いながら、三回、七回廻ると聞いています。その方法は、自分の身長だけ前進する方法ですから大変な修行です。又、聖域に向つて板の上で礼拝を行う時は、額の当る部分だけ凹んでいるそうです。人々の信心の力が解るようです。

浄土宗の礼拝行は、南無阿弥陀仏を三唱す

る内に一遍上品礼を行う作法で、まず合掌をして坐ったままお念仏を称えつつ、両足の指を爪立て、おもむろに左膝を上げ、二唱目の南無阿弥陀仏を唱えながら立上り、三唱目から静かに坐り、五体投地接足作礼を行います。その間、御本尊から目を離さず威儀正しく修法します。加行といつて一人前のお坊さんになる時には、大体三千遍以上修法されます。

中品礼は、両膝を地につけたまま、腰を上げ跪すく形で、接足作礼の念をいたします。

下品礼は、合掌のまま、静かに頭を下げる作法でこの時にも目を聖容に注ぎつつ、上体ごと前傾することが正しい作法です。

合掌礼拝を行う時は、形だけでなく、内なる信心の炎が燃えていなくてはいけません。阿弥陀仏の御本願力の絶対不二の広大な慈悲を深く信じ、誠の溢れたもので、自己の功德とすることばかりでなく、自他法界に普ねくふりむける心が信心を決定します。

この世、あの世共にみ仏にお導き頂くのだという心構えで合掌礼拝のおつとめをいたしましょう。ナムアミダブツ。

幸福

＜苦を超えること＞

一

われわれの日々のいとなみは、意識すると意識せぬとにかかわらず、みんながみんな幸福を求めてのいとなみであるといえないだろうか。街頭に立って流れてゆく人の波をながめていても、若い人も、年寄りも、子供も、電車にゆられている人も、自動車や自転車を走らせている人も、ことごとく幸福を得ようともがいて動いているようである。いま、死によって家族と別れて悲しみであっても、やはり人である以上は、幸福をもとめて生きているのである。

しかし、真の幸福などというものが、この世にありう



宮 川 満

(富山県魚津市在住)

るものだろうか。幸福でありたい、ありたいともがきあえいで、互に人と人とが争いあって、しのぎを削る努力をしているが、果して幸福というものがあるのだろうか。なるほど、金銭にめぐまれない人びとには、金を得ることが幸福をつかむことであろうし、病弱な人が健康にめぐまれることは幸福であろう。しかし、金にめぐまれている人には、財的に満たされても幸福と感じないであろうし、健康な人には、丈夫な身体は、かならずしも幸福の条件とはなり得ないことはいうまでもない。また、それとは反対に、金のないことや病弱なからだをもっていることが、幸福だという人もあり得ることである。

女性にとっては、容貌の美しいことは、なによりも望

ましい幸福の条件であろうが、またその美しさのゆえに福を招くことも多いのがこの世であろう。賢いことは望ましいことであっても、賢さのために不幸を招くこともある。子供のないことも、この頃は幸福なこととおもう人があるが、また子供のないことが不幸とも感ぜられる。

人間であることが幸福であるが、虫けらであることが、もっと幸福であると望まれもするときがある。

このように人の世のいろいろな姿を一つ一つ静かにわが身に引きよせて考えてみると、「幸福ってなんだろう？」と自分にたづねてみても何のことだかさっぱりわからなくなってしまう。

それは、幸福というものは絶対なものではない。少くとも現在われわれが願ったり望んだりしているものは、絶対な幸福ではないからである。お天気がつづけば一雨がほしくなり、雨が続けばお天気になってほしいというような、自我的主観の気まぐれな気分にはかならないものが、幸福というものではないだろうか。

二

人生というものは、はてしない海原であり快晴無風の

静かな日ばかりではない。ひとたび縁にあえば、平隠の静けさは、たちまち狂乱怒濤と変るのである。だから幸福というものは、不幸の色を変えた寸時の状態にすぎないとも思われる。

芥川竜之介は「件儒の言葉」のなかに、つぎのようなことを記してある。

完全に幸福になり得るのは白痴にのみ与えられた特権である。いかなる楽天主義者にもせよ、笑顔に終止することは出来るものではない。いやもし真に楽天主義なるものの存在を許し得るとすれば、それは唯いかに幸福に願望するかということのみである。

人生を幸福にするためには、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戦ぎ、群雀の声、行人の顔あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。

人生を幸福にするためには？　しかし瑣事を愛するものは瑣事のために苦しまなければならぬ。庭前の古池に飛びこんだ蛙は百年の愁を破ったであろう。が、古池を飛び出した蛙は百年の愁を与えたかも知れない。いや、芭蕉の一生は享楽の一生であるらあると共

に、誰の目にも受苦の一生である。我々も微妙に楽しむ為には、やはり又微妙に苦しまなければならぬ。人生を幸福にするためには、日常の瑣事に苦しまなければならぬ。雲の光り、竹の戦ぎ、群雀の声、行人の顔、あらゆる日常の瑣事の中に墮地獄の苦痛を感じなければならぬ。

芥川によると、完全な幸福とは白痴にのみ許された特権であるといっており、白痴でないかぎり人生に完全な幸福がありえないことをおしえてくれると思われる。そして、「瑣事」においては、人生を幸福にするためには、瑣事を愛することであり、愛するとは、瑣事を苦悩することであることを示しているようである。

元来、われわれが幸福を求めるといふことはその幸福の内容や性格がどのようなであろうとも人生そのものが幸福でない、つまりどうしても、人生というものが不幸だからであらう。人生が不幸だから、幸福を追ひもとめるのであって、もともと人生が不幸でなかったら、幸福というものが、およそ意味のないものであるし、したがって、求めるといふことがありえようはずもない。

「人生は苦なり」といふことは、いかにも嫌なことで

あり、いとわしいことであるが、幸福をもとめる人びとは、その嫌な、いとわしい人生を感じるがゆえであつて、たとえ快樂主義者といえども、やはりその底に、芥川の言葉をまつまでもなく、幸福の願望が存するわけである。そこでかれは、人生の瑣事を愛し苦悩することが幸福なりという結論をみつけたのである。

三

人生はきわめて不完全である。しかし、この人生の不完全さは人生そのものの罪ではなくて、むしろ不完全たらしめている人間性の側にあると思うのである。もともと純粹客観的な人生というようなものは、われわれに知られようはずのものではないのであって、われわれが人生とよんでいるのは、われわれの小さな主観にすぎないものである。そして、この人生を暗く不完全な争いにみち、怒にあふれ、いとわしいものにしていくのが、結局われわれ自身なのである。われわれの欲望が止まるところを知らぬがゆえであり、煩惱無尽といわれるものである。

この無尽の煩惱が、自己の人生を暗く、不完全に不幸にあらそいに追ひこんでいるのである。

われわれは、年をとるほどに、不幸が身にしみてくるが、幼い子供が幸福なのは、自我愛がきわめて局限されているからであって、年をとるほど、自我愛が増長するものであるから、いよいよ不幸が増すのである。

愛欲と名利とが、無限大に発展することは、二河の白道の譬のごとく、「深くして底なし、南北にほとりなし」との言葉にもよくうかがわれることである。

不幸をいたみ悲しむならば、その反対の幸福をもとめてはならない。なぜならば、苦を樂にかえることほど無意味なことはないのだから。

苦は超えるべきものであって、苦を樂に置きかえるべきものではない。苦樂ともに煩惱の所生である以上、樂によつて苦なきを得ることは不可能なことである。

苦は超えなければならぬ。幸福とは、この苦を超えた境界の風光であるというべきであらう。

苦を超えるとは、煩惱の満足もよく、不満足もよい、あればあるがままによく、なければなきままによい、という煩惱の満と不満に左右されない心境である。

要は、人生がどうあらうと、それに煩わされず安住してゆけることが、もっとも幸福なことである。

この幸福を煩惱の充足による幸福と區別して、至幸と

も至福ともいうのであるが、この至幸至福は、離煩寂滅の境地でもあり、もっとも高い宗教的境地というべきであらう。

仏教では、抜苦与樂の法といわれるが、苦を樂におきかえるのではなくて、苦樂の根元を抜くのである。したがって、与樂の樂は、「無為樂」「寂滅為樂」などといって、苦樂対立の樂とは、あきらかに區別されるものである。

苦樂はともに煩惱という世界のものである以上、苦は樂に代つたとしても、それは幸福ではない。だから無量寿經には「抜諸生死勤苦之本」と説かれているのであって、生死の勤苦の根元を抜くのであるから、それは、生にも死にも苦にも不幸にもわずらわされない境地である。

生けらば念仏の功つもり、死なば浄土に無りなん、とは法然上人の有名な仏法語であるが、生もよく、死もよく、苦よく、樂もまたよい境地こそ、無碍の世界であり、念仏の世界である。





ひとくち伝記（六）

悲壮な白衣の激励

高橋良和

昭和三十六年二月二十八日、この日に法然上人に和順大師の大師号が宮内庁で謚号されたので、東山から岸門主、千々和宝天執事長、それに宗務から小林大巖宗務総長などが東上してそれをうけ、この日京都駅にこの大師号が到着したのである。

駅頭には一山の代表や、檀信徒など多数が整列してこれを迎えるなか、まず駅長室に一応安置し、そのあと列を整えて、知恩院へと進んだのである。

そして、この列は三門前で自動車から降り、千々和執事長が、捧持したひろぶたにはふくさをかけ大師号が捧げられていたのである。一步、一步石段をあがる行列まことに厳肅な感じであつた。

然しふとそのとき思つたのであるが、千々和執事長が捧持している箱の手の位置が多少下つてゐることに気がついた。

重いから、仕方がないだろうと思つていたら、そのときから、千々和執事長の身体の調子が悪かつたことをあとで聞いてわかつた。

もつたないことであつたが、なんとあの箱の重たく感じたことが、手がぬけそうに思つた。

と述懐してゐた。

それから、つづいて大法要であつたが、そのときの気色もあまりよいとは思へなかつた。

然し五十年目に一度の法然上人の七百五十年の大法要

である。身体の不快ぐらいは致し方のないこと、千々和執事長は、一山の総指揮をとって、この大遠忌を無事つとめたのであったが、それから間もなく床についたのであった。

御本人は薬の好きな性ではなかった。むしろ薬などは、今まで口に入れたことなかったらしいが、遠忌の前ごろから、みているとちよいちよいビタミンを口にしていくこともあった。

ところが、この千々和執事長は病床に臥すようになってから、とても気がかりな一宗の問題があったのである。

というのは、浄土宗の合同ということであった。一応遠忌前から合同への歩みよりはあったものの、かたちだけは合同するということであったが、まだいろいろな問題があつて、真の合同は出来ていなかったのである。

千々和執事長は、衰弱してゆく自分の身体のことを気にしながらも、なんとか合同を早くやりとげたいというねがい、立っても居てもたまらなかったのである。

然し病気はだんだん進んで、とても回復はむづかしいという宣言もうけていたときであつただけに、一日千秋

の思いで、この合同を待ちかねたのであった。

然し、合同への会談は相変らず、暗焦に乗りあげて動きがとれない。

折角ここまでできたのに、再び分列する危険性無きにしてもあらずである。

あの頑丈な千々和執事長も、全く痩せて、見るかげもなく、いよいよ命短夕に迫れるを思わすようであつた。たまたまお盆前であつた。

再び合同への会談が、知恩院山内の華頂会館の別館で開かれたのは、むせるような暑さの八月はじめである。

千々和執事長は、病床から、この日のことを聞いて、合同の話し合いはうまくいっているか。

と、何度も何度も、かすかな息の下から家族にたずねていたが、残念ながら、合同の話し合いは、一步の前進もなかつて、対立のままだったのである。

だんだん進んでいるようです。

家族のものが、みるにみかねて、そのように返事をすると、口もとに笑みをうかべるかの如く、またすやすやと眠っていったのであった。

然し話し合いは、それと反対に、何等進歩していな

い。

丁度、真夜中のころであつた。

本山の一課長か、千々和執事長のところに連絡にきたのである。

とうてい合同への歩みよりは無理に思います。それで、本山の内局が、あなたをまじえて合議したいと考えますが、

ということである。

そのとき、千々和執事長は、まるで元気なときのような声で、

わしもみんなに会いたい、枕元にきてくれるか。

はい、すぐさま、まいります。

一課長は、これを内局に連絡したのであつた。

そのとき、千々和執事長は、

おい、その白衣を出せ。

命いくばくもない。この重病人の声にしては迫力があつた。

骨と皮とにやせた、そして立つことも出来ない身体であることを本人も家族も、承知しているのに、このことばである。

家族は仕方がなく、白衣を出すと、千々和執事長は、よりかかりながら立ちあがって、白衣に手を通し、その上に改良衣をまとい、日頃つけていた執事長用の袈裟を首にかけたかと思うと、布団の上に正座して、内局のくるのを待ったのである。

やがて、内局が揃つた。

みんなは、あれっとおどろいたのである。

瀕死の執事長が正座しているのである。そのとき千々和執事長は、

みんなのむ、わしに代って、なんとか合同への歩みよりをしてもらいたい、今になって、合同不成立は恥しいことである。たのむ、たのむ。

内局の一人一人の手を握って訴えたのであつた。

内局の各部長もこの誠意に涙して泣いた。もちろん千々和執事長も泣いていた。この激励があつて、内局の各部長は再び合同への会議をつづけたのである。やがて白衣をぬいで、寝間着に替えた。千々和執事長の顔は蒼白であつた。全性力がぬけたように、あとは昏睡状態に入つたのであつた。最後のつとめとしては悲壮な姿であつた。合同のかげの一人の犠牲の人でもあつた。

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり (再版) 安居香山著 価30・〒15

浄土宗のおしえ (五版) 宮林昭彦著 価30・〒15

一枚起請文をめぐって 村瀬秀雄著 価120・〒35

選択集私解 竹中信常著 価120・〒35

ものいう石 竹中信常著 価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替東京 82187

村瀬秀雄訳

新刊

和文浄土三部経

新書版
204頁

附・法然上人撰「三部経釈」抄述

念仏信仰の聖典三部経の全訳

定価200円 送料55円

発行所 法然上人鑽仰会

TEL (262) 5944
振替東京 82187

「浄土」購読規定

一部定価 金六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十四年五月二十五日 印刷

昭和四十四年六月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十四年五月二十五日印刷 昭和四十四年六月一日発行

浄土

第三十五卷

第六号

定価金六拾円 (送料六円)